

ハナショウブの育種（第1報）

後藤 利幸

(大分県温泉熱利用農業研究所)

Goro, T.

Breeding of Japanese Iris (1)

1. 緒言

ハナショウブは我が国の原産で、古くより本邦において品種改良が行われ、現在までに多くの品種が発達した。ハナショウブは花壇や鉢植として観賞するのもち論であるが、切花としても重要な花きの一つである。切花栽培においては特に早咲であることが最も期待される条件の一つである。しかし、従来の早生営利品種は初霜であるが、この初霜よりさらに開花期の早い品種を育成するため本研究を企図したものであり、この目的に近い品種を育成したので報告する。

なお、本研究は前所長宮沢文吾博士の研究を継承したものである。

2. 育成経過

1954~1955年に極早生品種である初花（1915年神奈川農試育成、中輪、3弁、紫脈）、中生の無双（1921年神奈川農試育成、大輪3弁、紅藍色の吹掛）、早生の初霜（大輪、3弁、純白）の相互交配を行い、これらの実生1,400株より1957年に31系、1958年に40系統を選抜

した。これらの選抜基準は第1に初霜より早生であること、第2には初霜と同程度でも有色花であることを条件とした。

これら選抜の71系統についてはその後開花期、花色、花の大きさ、草丈、葉姿、草勢などについて詳細に調査し、優良と認めた20系統について1960年それぞれ命名したが、育成種の品種名や特性は第1表の通りである。

3. むすび

育成の初春、初咲みの開花始は、従来の早生営利品種である初霜に比べて14日前後早く、また、育成の早生種には従来の早生品種にない有色花のあることも特徴である。

開花期はその年の気象や地勢などの環境条件によって異なるが、初春の開花始めは海拔180m、年平均気温14.5°Cの当農業研究所で5月11日である。しかし、暖地や平坦部の日当りのよい場所ではさらに早く開花するものと思料する。

第1表 育成種の特性

品 種	系 統	開 花 始	弁 数	外 弁 色	内 弁 色	花 大 小	草 丈	葉 姿	草 勢	
		月 日				cm	cm			
初花	春み紫	57~29	3	濃紫	紅細絞	同色	16.0	70	直	強
		58~1	3	紫	紅紅絞	同色	15.0	95	直	強
		57~36	3	濃紫	紅紅絞	同色	15.5	100	やや直	極強
初花	鶴見光	58~9	3	淡紫	淡紫	同色	17.0	106	やや直	強
		58~11	6	淡紫	紫紅	同色	16.0	110	やや垂	強
藤別	浪府衣	58~144	6	濃藍	白絞	同色	18.0	100	直	強
		58~18	6	極濃	白絞	同色	14.0	90	直	強
		58~104	3	紫	に白絞	同色	16.0	100	直	強
		58~121	3	濃紫	に白絞	同色	15.0	90	やや垂	強
初紫	勝紋の	57~172	6	極濃	濃紫	同色	15.0	80	やや垂	強
		57~3	3	紫	紅やや絞	淡紫	18.0	80	直	強
初紫	浪紋の	57~92	3	濃紫	に白絞	同紫	14.0	90	直	強
		57~7	3	濃紫	に白絞	同色	14.0	75	垂	強
		57~28	3	濃紫	に白絞	同色	14.0	85	垂	強
		57~176	6	濃藍	に白絞	同色	15.0	90	垂	強
朝城	磯揚	57~96	3	極濃	濃紫	同色	14.0	90	やや垂	極強
		57~67	3	濃	濃紫	同色	15.0	100	やや垂	強
		57~173	6	藍	色に小絞	同色	14.0	90	やや垂	極強
		57~235	5	濃	紫	同色	16.0	130	垂	強
		58~162	3	濃	純紫	同色	19.0	100	直	強

(注) (1) 開花始は6年または7年間（1957~1963）で最も早い期日
 (2) 初霜の同期間の最も早い開花始は5月26日